

第4回「ピンチをチャンスに換える」

「矢ガモ事件、ピンチをチャンスに換える」

それは青柳清が「スポーツ吹矢」の団体を立ち上げて8年目、会員が7,000人まで伸びた2006年3月21日のことでした。東京・上野の不忍池で金属製針状の矢が頭や首に刺さったカモが3羽発見されました。マスコミは一斉に「矢ガモ事件」としてTV・新聞などで大々的に報道しました。

青柳清は「これは（「スポーツ吹矢」の矢と）誤解されると大変なことになる」と瞬時に判断しました。そして決して逃げず、すべての取材に応じる方針を決めました。凶器は「吹き矢」という報道もあったからです。また経営者でもある青柳清は一度悪いイメージを与えるとそれが間違っていたとしてもなかなか払拭できないことを知っていました。一方で青柳清は、この「スポーツ吹矢」発足以来の重大な危機を、むしろ「スポーツ吹矢」の安全性を証明する好機とも捉えていました。

「報道ステーション」に出演 安全性訴える!!

ただちに青柳清は団体の幹部とマスコミのすべての取材に対して事件で使用された矢と「スポーツ吹矢」の矢とは全く違うこと、とくに「スポーツ吹矢」の矢については矢の先端を丸め、フィルムを使って約1gという軽量で制作しており、危険性や殺傷力のない安全性を最優先にした製品であることを強調しました。そして何よりも「スポーツ吹矢」ではこれまで一度も事故がなかったことを訴え、一刻も早く事件を解決させて、危険性のある用具の販売は中止すべきである、と提言しました。今でも人気のあるテレビ朝日のニュース番組「報道ス

テーション」には青柳清自ら矢を持って出演、安全性を紹介しました。やがてこの残虐な事件に使われた矢は「ブローガン」という米国製の用具の矢であると断定され「スポーツ吹矢」の矢とはまったく別のものであることが判明しました。

このような事態が起こることも想定してダイセイコーの「ビックサクセス」は当初から用具の安全性を追求、使用に当たっての無事故に最も力を入れ、入会者や用具の購入者には住所、連絡先を明記してもらうなど最大限の努力を払ってきたことも、マスコミを通して伝わりました。

青柳清の目論見通り、「矢ガモ事件」というピンチをチャンスに転換して「スポーツ吹矢」の安全性が証明されたのです。

安全性ばかりではありません。「スポーツ吹矢」の呼吸法が健康にもつながり、多くの人に喜ばれていることが報道を通して全国に伝わったのです。こうして「スポーツ吹矢」最大の危機をそれこそ体を張って守った青柳清に今度は朗報が届きます。（以下次号）



特許発明のピンとそれを装着したビックサクセスの「NEW矢L(ラージ)タイプ」。「スポーツ吹矢」の安全性と的中率向上の象徴となっている。